

# 日本記者クラブ会報

第 483 号  
2010 年  
(平成22年)  
5月10日発行

〒一〇〇〇〇〇〇一  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
© 社団法人 日本記者クラブ  
<http://www.jnpc.or.jp>

## 本年度クラブ賞

### 梅津（毎日）学芸部専門編集委員に

4月23日の理事会で、2010年度日本記者クラブ賞の受賞者に、毎日新聞東京本社<sup>（61）</sup>の梅津時比古<sup>（61）</sup>学芸部専門編集委員が決定した。

梅津さんは入社以来、事実上「音楽」一筋の専門記者で、現在、夕刊にコラム「音のかなたへ」と「コンサートを読む」を連載している。



クラシック評論で斬新かつ独自の世界を確立したことが高く評価された。インターネット時代にあって、新聞も放送もこれまでのニュース報道に加えて、文化や社会についてより質の高い評論、解説、分析などがとめられている。その意味で、人間、人生、芸術などへの考察の中で

つづられる、梅津さんの音楽評論は、期待される新聞、放送ジャーナリズムの一端を担う先駆的な仕事であるとも評価された。

ところで、選考過程で多くの委員が称賛した、詩のように完成度の高いあの文章は、どんな場所ですべて書かれているのだろうか。

そんな興味にもかられて、毎日の編集局を訪ねた。写真部の方を煩わせ撮ってもらったのが、上の一枚。場所は学芸部の一番端っこ。机の前面には資料が二重三重に

1メートルほど積み重なっていた。ここでは切れているのだが、この写真の左手前にも、60センチ程度の出入りの隙間をあけて、同じ高さの資料の堆積がある。前と左横を資料の山で囲まれ、背後（右）はロッカーで通路と仕切られている。机の右手も小高い資料の丘といったところ。

いわば谷間の机の上には30センチ四方のスペースが残されていて、パソコンが置かれていた。そこも窮屈になるとこうするんですと、引き出しから小型端末を取り出し膝の上で叩く仕草をした後、撮影したのがこの写真なのだ。

人に見られることなど意識したことの無い、広くて雑然とした編集局の一隅、紙に囲まれた谷底で、あの原稿はつくられていた。

#### 宮沢賢治とシューベルト

梅津さんには地方支局の経験がない。71年に入社して82年にケルン音楽大学へ留学するまで、11年間、校閲部に在籍した。地方へ行くとコン

サートが聴けなくなるし、校閲は大事な仕事だとも思えたので、わがままを通したのだという。

しかし、そのころからすでに学芸部は、梅津さんの音楽記事を年に何回かは紙面に載せていた。もちろん、才能があつたからだろうが、編集局の持つこのおおらかさも、その大成を後押ししたといえるのだろう。

ドイツから帰って、西支局（新宿）で社会部記者を1年半。そして学芸部へ。校閲の終わりのころから数えると、30年余をクラシック相手に仕事をしてきたことになる。

梅津さんは二人の人物を特別なものとして意識し、それぞれに関係した立派な本を書いている。宮沢賢治とシューベルト。二人の共通点を、こんなふうの説明した。賢治は花巻、盛岡が中心で、シューベルトもほとんどウィーンを出ていない。井蛙といふこともできる。でも、井の中の蛙大海を知らず、には後段がある。されど空の高きを知る、と。

新聞社というところはそれこそ世界の情報の洪水みたいなところだからこそ、紙の山に囲まれた音楽担当という井戸の底から、空の高きをみつめての仕事には大事な意味がある。そう確信しているようだ。

（専務理事 岩崎玄道）

## 座談会 「密約」問題とジャーナリズム

### ■富森勲児

元朝日新聞政治部長、編集局長

### ■佐藤信行

元共同通信ワシントン支局長、編集委員長

### ■清水幹夫

元毎日新聞政治部長、論説委員長

### ■羽原清雅 = 司会（会報委員）

元朝日新聞政治部長、西部本社代表

（発言順）

外務省の有識者委員会が3月、日米間で疑惑視されていた国内への核持ち込みと、沖縄の本土復帰に伴う米国負担金の日本側の肩代わりなど4件の「密約」について結論をまとめました。長い間スッキリせず、外交と報道との間に緊張関係をもたらしただこの問題について、当初から直接取材にあたってきた3氏に話し合ってもらいました。安保条約改定から50年、沖縄返還交渉からほぼ40年。政権交代があつてはじめて明らかにされたこの問題は、今後もまだ解明すべき点も多く、若い現役ジャーナリストへの期待は大きいようです。

なお、西山太吉氏が情報開示を求めた裁判では、密約文書の内容を認めるとともに、開示を外務、財務両省に求める判決が4月9日に出了。ただ、この座談会が行われた同7日時点ではまだ示されていませんでしたので、一部加筆させてもらっています。（羽原清雅）

#### 〈現場の取材体験〉

羽原 最初に、それぞれ、海外あるいは国内のどんな現場で取材に当たられたか、お話しください。

富森 1969年の佐藤・ニクソン首脳会談に、当時、首相官邸のキャップをやつていましたんで同行しました。そのときは沖縄返還で有事に核の再持ち込みがあるのかどうか、どういう形で共同声明に表現されるのかというところがポイントだった。共同声明の8項に「事前協議におけるアメリカ側の立場を害することなく」という一項目が入っているんですね。佐藤側近からは核抜き・本土並みに成功したの一点張りでしたが、これは再持ち込みを事実上保証したものだ。日米双方のさまざまな情報を総合して、日本側はそうはいわないけれども、アメリカ側ではそういうことをいっているという記事を、私は当時書きました。

#### 愛知外相が突然、怒り出した

これを書いて、ワシントンからニューヨークに移つて、当時の愛知（揆二）外務大臣に、木谷忠（朝日新聞ワシントン）総局長と私とでインタビューしたんですが、いろいろ聞いているうちに愛知外相が突然怒り出して、私は面罵されたんです

よ。国賊扱いで、面罵された。つまり、私が書いた「共同声明の8項は事実上核再持ち込みを保証したものだ」ということが、気に食わなかったんですね。まさにずばりそのことをいわれたんで、かえって怒ったのかもしれない。

当時の我々は、だれもそうだったんですけれども、若泉（敬）さんが仲介して日米両首脳がこっそりと密約を交わしていたという話は、わかりませんでした。この共同声明の8項と、佐藤首相がナショナル・プレス・クラブで、アメリカから事前協議があつた場合には速やかに前向きにこたえるといった、この二つがセットになって、事実上、沖縄への核の再持ち込みを保証した。そういうことを書いたんです。私はずうっと随行して、大変居心地の悪い思いをしたのが記憶に残っています。

佐藤 私は、1973年から77年までワシントン支局におりました。偶然の機会に、「ラロック証言」にぶち当たったわけです。たまたまその日——その日というのは、1974年の10月2日でしたか、議会のプレスギャラリー、これは日本では例えば記者クラブですが、そこに、議会の議事録その他、報告文書がすべて集

まることになっていました、そこで、おもしろい文書を見つけたんですね。

公聴会の記録なんです、メインタイトルは「核兵器の拡散」で、上下両院の原子力委員会の軍事応用分科委員会の公開の公聴会の記録の文書。小冊子でしたけど、「あつ、これはおもしろい」と。サマリーをみると、まず、外国の港にアメリカの艦船、あるいは飛行場に航空機が入る場合に、あえて核をおろすことはないところですね。「ああ、これは大変だ、これは日本も関係するんじゃないか」と。外国の港といったら、日本も外国の港だと。で、サマリーは2ページほどのものでしたが、全文読んでみようという気になって。実はこれが現物なんです。まさにその当時の現物なんです。(笑)

や、びっくりしましたねえ。かつて海軍提督、海軍少将を務めて、太平洋で巡洋艦プロビデンスの艦長を務めて、日本にもおそらく出入した経験があったと思われる人が、日本に入るときに核兵器をおろすこととはないと断言しているんですね。

「核兵器を積み込める場合には、艦船がオーバーホールないし大規模な修理を受けるための寄港の場合を除いて、通常はいつでもこれらの核兵器を艦船内に積み込んだままである」と、こういつているんですね。

アメリカ海軍は艦船を日本の港に入らせる場合には核を積んだままであることが明確に示された。

## 偶然につかんだ「ラロック証言」

佐藤

核兵器のありかについては確認も否定もしないといったんです。

この否定に対して、私はいろいろ関係者に当たった結果、実は密約がある、否定はしているけれども、暗黙の了解ないし秘密協定があるに違いないと判断しました。なぜならば、こういうものがない限り、ラロックがいうように、核を積んだまま出入できるはずはない。日本が知らないわけではないだろうと思ったんですね。

結局は、今回の有識者委員会の結論も「暗黙の合意」。しかし、2000年ごろからアメリカ側で、アメリカがこれぞ密約の秘密協定であるとした文書が発見されるわけですね。これが例の「討議の記録」なんです。しかし、討議の記録にも、「核搭載艦船の寄港」というような表現は一つもないんですね。だから、日本側は、これはそんなアメリカがいうような密約文書と我々は理解してなかった、と否定したわけですね。いずれにしても、アメリカ側としては、これこそが秘密文書であり、討議記録で日本はちゃんと核の一時持ち込みについては認めていると主張しているわけなんです。

今回の有識者委員会の結論は、日本側はそういう解釈をとってなかったかもしれない。しかし、日本側は、核の一時持ち込みの事実については承知していたというものです。それを明らかにすることは、非核3原則が崩れて、それこそ現政権が倒れかねないような渦に巻き込む可能性があるので、結局は、日本政府は終始一貫、いわゆる一時持ち込みを含めてすべての核持ち込みについては、実際に密約はないし、仮にそういうことなら、我々はこれを認めないと主張し続けた。

にもかかわらず、現実問題としては、アメリカが持ち込んでいることは認識、了承していたわけですね。だから、そういう意味では、今度の有識者委員会の結論は、私は非常によくできていると思いますね。

羽原 68年の施政方針演説で佐藤首相が非核3原則をうたい、さらに72年に閣議決定して、その後、国会決議になる。そうすると、ちょうどラロックは国会決議の後ですね。非核3原則で安心というか、安定したような状況の中で「ラロック証言」が飛び出したから、非常にインパクトが強かったということですね。

佐藤 そうです。ラロックは74年なんです。だから、ラロックのとき

は、もうすでに非核3原則はできているわけですよ。

清水 1970（昭和45）年の7月から72（同47）年の1月まで外務省のクラブを担当して、まさに富森さんが同行された佐藤・ニクソン共同声明を受けて、沖縄返還協定の日米交渉が本格的な時期になっていて、外務省のクラブはその取材一色でした。私どもの態勢は、西山（太吉）キャップ以下政治部4人、経済部、英文毎日からも来ていましたし、沖縄返還協定の取材チームだったというのが実態だったと思いますね。

最初に取材の打ち合わせをしたときに、この沖縄返還協定をめぐる日米交渉にどんな問題があるのかを整理してみたんですが、25年間もアメリカの施政権下にあったわけですから、実にさまざまな問題があった。一番の問題は、先ほどの佐藤・ニクソン共同声明での核抜き・本土並みという問題。

### アメリカは一切支払わない

もう一つは、軍用地の復元補償問題ですね。これは後に復元補償費400万ドルの密約という問題になるわけですが、その辺の復元補償というのは大変複雑で大きな問題だったわけですね。

アメリカは、もうサンフランシスコ講和条約のときに放棄しているはずだというわけです、請求権は。そこに沖縄も含まれるんだということ、で、応じようとしな。しからは、講和後の問題はどうかという問題が残るわけで、この対米請求権というのは、土地の復元補償のほかに、例えば交通事故、刑事事件の補償の問題、アメリカの軍人による事故の補償の問題等々300件ぐらいまだ未解決の補償問題が残っていました。

私は、当時、取材を始めるときに聞いたのが、いわゆる政府筋という情報源なんですけれども、要するに、今度の返還に当たっては、アメリカは、沖縄にある基地機能を少しも低下させないというのが大原則であると。これは日本側もオーケーしてくれよということ。もう一つは、対米請求権、支払いは一切日本に対してしないと。要するに、沖縄返還に伴う支出は一切アメリカはしない。これはアメリカの議会の議決にもなっていた。同時に、返還後は段階的に基地の費用を日本に肩代わりさせるのだという、この2点。これはむしろ暗黙の了解として我々（政府）の頭にあるんだというようなことを聞いておりました。いろいろ問題があるけれども、要するに、交渉の焦

点となり、最後までもめるのは、核抜きの表現なり、実態であり、再持ち込みはないのかどうかという問題であり、最後は、対米請求権を認めてアメリカが軍用地の復元補償費などをきちんと払うのかどうかという、そういう金銭的な問題、この2点に絞られていったということですね。

で、最後までもめたのが、実は復元補償費の問題でした。71（昭和46）年6月にパリでOECDの閣僚会議がありまして、愛知・ロジャーズ両外相が出席するんで、同行せよということなので、急遽同行して、そこで最後に残った復元補償費の問題が決着するわけです。双方の具体的な話し合いの内容はなかなかベールに包まれて詳しくはわかりませんでした、雰囲気はそこで体験したということですね。

### 密約の背景は

羽原 それでは、密約というものをどう考えるか。それから、密約の生まれる背景の分析をお願いします。富森（佐藤・ニクソン会談の）共同声明の8項と、佐藤首相のナショナル・プレス・クラブでの演説、それでもまだアメリカは納得しない。ニクソンとしては、軍部と議会の有力者に説明するためには、「日本が



富森 叙児（とみのり・えいじ）  
1928年生まれ  
社ワシントン  
長編集局長  
国際担当  
のもり・えいじ  
53年朝日新聞  
特派員 政治  
常務取締役出版  
部

らちゃんと一札とつてある」とどうしても示さなきゃいかん。そこで、若泉（敬）さんの関与する密約が出てきたと思うんですね。両首脳の署名した合意議事録では沖縄の基地の名前まであげて核再持ち込みを示唆しているのですよ。だから、共同声明の8項と、佐藤演説と、それから、ニクソン・佐藤の合意議事録というのは、これは3点セットなんです。表に出た部分は共同声明で、共同声明を読んだだけでは、これは何とも解釈できる、非常にうまい書き方がしてあるわけです。しかし、その中に隠れた部分として、若泉さんの介在する問題がある。これは、私はもう間違いなく密約だと思うんですが、有識者委員会は、これは密約に当たらないという。佐藤さんからすれば、「そんなものは破いてもいい」という程度の認識だったんでしようが、アメリカ側としては軍部なり、議会の有力者に説明する非常に有力な証拠になっているわけです。

## 日米密約の問題点

| 密約                        | 内容                                                 | 有識者委員会の見解                                              |
|---------------------------|----------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| 日米安保条約改定時の核持ち込み（1960年1月）  | 核を積んだ艦船などの寄港・通過について、核の持ち込みに必要な事前協議の対象から除外する        | 明確な文書による合意はないが、暗黙の合意という「広義の密約」があった                     |
| 米軍の自由出撃（1960年1月）          | 朝鮮半島有事における米軍の戦闘作戦行動を事前協議なしに認める                     | 日本側に密約との認識があったのは確実で、非公開文書「朝鮮議事録」も確認された                 |
| 沖縄への核再持ち込み（1969年11月）      | 沖縄返還後に重大な緊急事態が生じ、米政府が核兵器を沖縄へ再び持ち込む場合、日本側は事前協議で承認する | 日米両首脳が極秘に交わした「合意議事録」は発見されたが、必ずしも密約とは言えない               |
| 沖縄返還時の原状回復費の肩代わり（1971年6月） | 返還協定で米政府の負担が決まっていた原状回復の補償費を日本が肩代わりする               | 吉野文六アメリカ局長が米側と交わした文書の拘束性は否定したが非公表扱いの合意があり、「広義の密約」に該当する |

## 3点セットだった合意議事録

富森

これは、外交文書の体裁を整えていないから密約ではないというようなことを外務省はいつているそうですけれども、しかし、私からすれば、これは間違いなく密約です。

うそを改めるチャンスは3回あった

佐藤 私も富森さんの意見に賛成です。

私自身の体験に即していえば、「ラロック証言」問題ですが、これほど長引いたのは、これはやはり政府の怠慢、自民党政権の維持を目的にした隠蔽工作であったと思わざるを得ないですね。しかも、今回、この密約が明らかになるまでの途中段階で、何回もこの虚偽、このうそをたす機会はあったんですね。

そもそも安保条約改定の交渉中にも、日本政府が、核の一時持ち込み（transit 領海通過・寄港）についてはどうかということをアメリカに確認させるチャンスはいくらでもあったはずなんです。しかも、外務省も、現実問題として核が出入りしていることはわかっていますから、この問題についてアメリカにはつきり、「禁止する」と提起しようとし

たこともあったわけですね。有識者委員会の報告書にも載っていますが、正式の安保条約改定交渉が始まる前に、いわゆる安保の部分的修正ということを考えた時期もあったようです。その際に、日本の港に出入している核についても、持ち込まないようになさせようということがポイントになっていったんですね。

だから、正式な安保改定交渉において、このtransitの一時持ち込みについて一切問題提起しなかったということは、アメリカがそういう一時持ち込みを現実に行っていることを当時から認識していたにもかかわらず、提起しないのは、これは現状のままでもいいですよ、ということになる。アメリカ側の資料である「討議の記録」どおりですね。「討議の記録」の中には、present procedureでし

たか、現在の手続きを続けるとある。



佐藤信行（さとうのぶゆき）入局74年、1937年生まれ、61年共同通信社編集長、ラロック証言賞受賞

現在の手続きを続けるということとは、核を持ったまま入港してもいい、ということになるわけですね。しかし、まだチャンスはあったんですね。田中内閣当時に、ラロック証言後、もうこの辺でtransitの核については認めようというところまで行ったにもかかわらず、田中内閣が倒れて、結局、そのままになってしまった。

さらに、3度目は、冷戦が終了したときですね。91年にブッシュ（大統領）が、アメリカの核装備艦船から戦術核を取り除くと発表したんです。だとすれば、日本はほっとしたと思うんですね。もうこれからうそをつくことはない。

大体、冷戦下であるがゆえに核が必要だった。核抑止戦略のもとで、何か事があったときに、アメリカが、日本には核を積んで入れないから対応できないなんていうことは困ると、日本政府は思ったに違いない。でも、そういう事態はなくなつたと。私の体験からすると、日本政府と

いうのは、うそをずうつとき続け、うそを訂正するチャンスを少なくとも3度も与えられながら、そのチャンスを生かさなかった、というのが私の感想です。

もつともこのほかにも、アメリカの認識を明確に知らされた大平・ラ

イシャワー会談（1963年）やラ  
イシャワー発言（1981年）の時  
もそうですね。

### 記事はクエスチョンズきだった

清水 私が取材を始めたとき、駐米  
大使は下田（武三）大使でした。下  
田さんは在任中に、「沖縄返還は核  
つきならば非常にスムーズにいくな  
だ」という発言をされてましてね。  
外務省の中のそういう人脈につな  
がる人たちも、核つき返還というこ  
とをかなり前提にしていた、というよ  
うな雰囲気でしたね。さすがに佐  
藤・ニクソン共同声明で核抜き・本  
土並みが打ち出されて以来、今度は  
何を聞いても核抜き・本土並み、の  
一点張りで、再持ち込みなどの質問  
には、固く口を閉ざしてきたん  
です。

しかしその場合、核抑止力を日本  
はどうするのかとか、沖縄の核が完  
全に撤去されたんだが確認するの  
かとか、核抜きを疑問視する声も外  
務省内に多かったという状態だった  
ですね。

核抜きの問題は、かなり記事にも  
しているんですが、当時の見出し  
は、大体クエスチョンズでした。  
確証はこちらもなかなかとれない問  
題ですから、核抜きは本当なのか、



（おきみ）みきお  
みきお 毎日新聞  
みきお 副委員長  
みきお 論説委員  
みきお 政治部長  
みきお 政治部長  
みきお 政治部長  
みきお 政治部長

だれが確認するかクエスチョンと  
か、そういう見出しで、非常に隔靴  
搔痒といえますかね。取材なり、原  
稿にしている、物足りなさを感じな  
がらも、どうしても大きな壁があっ  
たということなんです。

羽原 密約は国益上やむを得ないと  
いう論と、一方で、知る権利に対す  
る背信であるというような、密約の  
存在を認めるか認めないかという議  
論が底流にありましたね。

清水 要するに、外交には密約が  
きものだとよくいわれます。実際に  
この密約は、その交渉において密約  
にすべき理由があるのかどうか、と  
いうより、ただ単に実体が知られて  
は都合が悪いから……といった傾向が、  
沖縄交渉には非常に強かった。要す  
るに、国民、素人は黙っていなさい、  
我々専門家に任せればいい、という  
姿勢が密約に走らせたんじゃないで  
しょうか、日本の外交というのは。  
だからこそ、都合が悪ければ隠して  
おくということが、今日まで当然の

ごとく行われてきたのではないかな。

### 外交秘密の暴露が使命

佐藤 国益と、いわゆるジャーナリ  
ズムの真実の報道との対立ですが、  
この国益というのは、私自身は、国  
家の利益じゃなくて国民の利益だ  
と思います。国益という場合に、何  
か国家が先にイメージされて、国民  
の利益が後ろに置かれる懸念とい  
うか、傾向があるんですが、我々  
ジャーナリズム、いわゆる民主主義  
国におけるジャーナリズムは、国民  
の権利にこたえて真実を報道する。

この理念は、死守しなきゃいかん  
と思うんですね。

ジャーナリズムの責務としては、  
あくまでも真実の報道を堅持しな  
がら、外交における秘密は暴露する  
ということを使命にしなきゃいかん  
のではないかな。つまり、その政権  
の利害によって秘密協定が結ばれ  
るようなことになる、これは日本  
の運命さえ誤りかねない。したが  
って、我々ジャーナリストとしては、  
あくまでも外交における秘密は暴  
露することを理念にしながら取材  
すべきでないかと、そう思っています。

### 虚構の上に立った外交

富森 いま、佐藤さんのいわれたこ

とに全く賛成で、ジャーナリズムの  
立場としては、そういう密約、これ  
を徹底的に追及するという姿勢でい  
くべきだと思います。現に、きょう  
もテーマになっているいくつかの密  
約について、日本のジャーナリズム  
はそれなりに頑張ってきたと思う  
んですね。各社それぞれの立場で頑  
張ってきたと思います。

頑張ってきたけれども、政府が  
これを否定すると、どうしてもジャ  
ーナリズムの立場というのは弱い  
ところがある。

私は政府としても、外交上、そう  
いう密約が必要になる局面は、そ  
うしなきゃ交渉が進まないという面  
はあると思います。けれども、ある  
段階で、交渉が一段落したところで、  
それが無理なら10年なり15年とい  
う期限を切って、それを明らかにす  
るルールが確立されなきゃならない。  
日本政府は何度も密約を明らかに  
するチャンスがあつたにもかかわらず  
政権交代があるまでシラを切り通  
したわけで、非常に誠実さを欠いて  
いた。ずっと虚構のうえに立ち続  
けて外交を進めているところに、非  
常に大きな問題があると思いますね。

### △これからの日米関係△

羽原 先ほど佐藤さんの話にもあつ

たように、冷戦が終わった時点で、もう一度日米関係というものはトータルで見直しておいた方がよかったと思うんですね。それができていなければ、結局、政権が変わったことで、日米関係の全体像のフレームができていないのに、普天間など個別の問題に取り組むことになった。だから、なかなか打開策が出てこない、という印象ですけれども、そのあたりの日米関係について。

日本の主体性をはつきりと

清水 何を日本としてはできるのか、できないのかということを、もうちよつとはつきりアメリカにもいえる体制、また、いわなきやならない、という時代だろうと思うんですね。

これまでの沖縄返還をみて、当時、日米間の力は圧倒的に違うわけですから、いたくてもいえない部分があつたということは想像にかたくないんです。これからの日米関係は、「対等」とあまり振りかぶらなくてもいいんですが、実態として、日本ができることはこれだけだ。しかし、アメリカとの関係で日本はこうするぞという、やはり日本の主体性をもつとはつきりと出した同盟関係でなければならぬだろうと思いますね。

富森 そのところですね。日本と

して非常に主體的なかわりを持つべきだと、私もそう思います。その主體的という場合に、日本が何をやるのかということですね。沖繩の基地の移設問題を例にとるならば、米軍にある程度沖繩から引いてもらう。そのかわり、米軍の持っていた抑止力を日本がある程度負担する。もちろん、核ということじゃないですよ。米軍が持っていた抑止力を日本がある程度負担をする。そのかわり、アメリカさん、半分グアムへ移ってくれと。やっぱりそういう形で話を持っていけないと。

ただ、いざというときは、アメリカさん、私を守ってください。でもふだんは、その辺でうろろろされちゃ困りますよということでは、アメリカもなかなか納得しない。アメリカにも国民がおりますし、世論はあるわけですから。その場合、日本はもうちよつと、抑止力という問題について日本が主体的に担っていくという発想がないと、日米関係は本当の意味で対等にならないんじゃないのかと私は思っているんですよ。そこを踏み越えていかないと、本当の日米関係の対等ということは実現しないと思います。

佐藤 日米関係というのは、世界を見渡しても非常に特異な関係だと思

うんですね。つまり、どこから始まったかというと、日米開戦を経て、日本が負けて、占領されて、そして、米軍が駐留し、独立のときに、それをそのまま維持して旧安保条約が結ばれ、それが改定されて今日に至っている。つまり、占領後の状況をそのまま引きずっている状態だと思ふんですね。

実際に憲法はアメリカの指導でつくられ、日本はそもそも戦力としての軍隊を持てなくなり、防衛はアメリカにほぼ完全依存ですね。日本が侵略を受けたときに、日本が対応できる限りのことはやるけれども、しかし、それ以上についてはアメリカに任せると。だから、日米の現在のの

取材源秘匿、取材倫理などに問題

清水

# 《西山事件》

**羽原** 日本記者クラブとしては、西山太吉さんの問題に触れざるを得ないと思います。西山事件は、密約の



羽原清雅 (はばら・きよまさ)  
1938年生まれ 62年朝日新聞入  
社 政治部長 西部本社編集局  
長 取締役西部本社代表など

状況というのは、日本の主体性を發揮しようにも、あまりにも縛りが大きくて、なかなかできない。

不自然な関係に終止符を

占領以降のこの不自然な状態に何とか終止符を打ちたいと思いますね。日本は防衛をアメリカに頼っているということは、言わば、アメリカの保護国ですね。だから、それでいいのかどうかという、やはり基本問題、根本問題に立ち返って考えないといかんのじゃないか。そういうことがあって、有事駐留論、あるいは、例えば第七艦隊だけでいいという考え方もあり得るわけですね。

一角を解きほぐすきっかけになった。と同時に、望ましくない取材方式といわれているような問題が提起され、論点は女性問題のほうへ走った。その世論の操作は、権力側からいうと成功したということがありました。

**清水** 38年もの年月を経て、ようやくジャーナリズムが国家のうそ、沖縄密約の壁を突き破ったことに大きな感慨を覚えます。

「密約と取材」の上で、次の3点

## 裁判所と政府は密約と認めた

富森

が教訓として残る。一つは、取材源の秘匿が、結果的にできなかったという事。これは取材の原点という問題ですね。

もう一点は、取材における社会的倫理性の問題。佐藤首相が「これだ」といつて、パッと女性問題を表に出した途端に、世論が180度変わってしまうという、この問題。

もう一つは、取材した内容が、新聞の報道だけじゃなくて、国会議員に渡ったという問題にどうしても突き当たる。私はこの手法というのはケース・バイ・ケースだという考えなんです。ただし、それは前提がありまして、やはり自分のところの報道機関でもって、とにかくありったけ全部報道していくということだろうと思うんですね。政府はもう知らぬ存ぜぬで、何の反応もないということ、それならば国会の審議でという改善の策をとったということが理解されるには、やはりいろんな前提が必要であらうと。

ですから、密約に迫る場合の取材の仕方というのは、取材で得た材料、内容、これの扱いというのは、これまでの経験、国の将来、国民の

将来を考えて、英知を結集して処理すべきであって、知り得た内容についても非常に慎重に立ち向かう必要があると、私は集約しています。

佐藤 政府権力、国家権力の秘密を暴くわけですから、これは暴かれた政府、国家は、どんな報復手段に出るか分からないわけです。熾烈な戦いに我々、あるわけですね、国家とジャーナリズムの関係は。その緊迫感、緊張感というのは常に維持していかなくちゃいけないと思います。つまり、取材源の保護、これについては、絶対に守るという気持ちが一番大事じゃないか。そして、得た情報は、真実の報道という、まさにその一点から判断して処理する。つまり、野党が政府に反対しているから、野党を助けるというような考え方は絶対にとるべきでない、私は思いますね。

富森 私も全く同感です。私は、西山裁判で弁護側、つまり西山側で証言をした人間なんです、西山君の取材のやり方、特に国会にそれを持ち込んだためニュースソースを秘匿

できなかったのは、ジャーナリストとして問題で、まことに遺憾な点だったと思うんですね。

ただ、私が証言したのは、西山君が明らかにしたものは、これはもう国家機密でも何でも無いという観点だったんです。毎日さんもいろいろ報道されたと思うし、我々も西山君の報道より先に、日本政府は本来アメリカが払うべきものを肩代わりしようとしていることを記事にしているんですね。したがって、これは国家機密でも何でも無い、これは公知の事実であるという観点から、西山弁護を私は証言しているわけですね。

ところが、判決は結局あれは国家機密であると認めてしまったんですね。したがって、国家公務員法の違反だと、そのかしの罪だということとを最高裁が認めてしまったわけですから、言い換えれば、もうあの段階で、あれは密約であるということ、裁判所と政府とが一緒になって事実上認めているんですよ、本当はね。

### 《ジャーナリズムの課題》

羽原 日本のジャーナリズムがこの密約問題をずっといろんな形で書いて

## 書いてきたことが証明された

佐藤

てきた。ジャーナリストが、政府を追いつめて、最終的に密約を出させたのでこれはジャーナリズムの勝利なのか。あるいは逆に、ジャーナリズムの力は不十分で、追いつめることはできなかった。政権が交代して、外務省のほうから出てきたという事で、負けたんでしょうか。

### ジャーナリズムの追及は続く

富森 それは今後も続く問題じゃないですか。現に今回の有識者委員会の結論の中で、外務省が廃棄してしまった書類があったり、疑問点がいくつもあるわけでしょう？ そういうものを追及をして、真相を明らかにしていくことが、今後のジャーナリズムの課題としてあるわけだ。

ただ、政府とジャーナリズムの立場では、やっぱり向こうは強いんですよ、権力を持っているわけだから。こっちは権力もない、筆一本ですから、その時々勝ち負けでいえば、こっちは負け続けということになるのかもしれないけど。

しかし、今回の全体の密約問題での報道では、かなり我々は、真相に迫ったところがある。それが民主党政権を動かして、有識者委員会にもなった。結論に不満は残るにしても、その意味では、ただ負けてだけいた

ということではないんじゃないか。  
佐藤 今回明らかになったことは、少なくとも核抜き問題についていえば、「ラロック証言」で私が推理した筋書きは、ほぼ当たっていたわけですね。今回、それが確認されたというわけですね。この核問題にいろんな問題があるというのは、まさにジャーナリズムが指摘し続けてきたことです。なぜ民主党政権は密約問題をとり上げたのか。これはジャーナリズムが指摘してきたからですね。そして、外務省に調査させ、さらには有識者委員会を立ち上げた。つまり、そこに至るまでのジャーナリズムの努力と問題提起があったからこそ、民主党政権もそれを取り上げたという因果関係にあると思うんですね。そういう意味では私は、我々がこの密約解明に大いに貢献したということだけはいえるんじゃないかと思います。

羽原 第8項から、疑惑を持ちながら、ひとつずつ突き崩してきて、事実に向ったというのは間違いはなかったということですね。

清水 そのとおりだと思いますね。とにかく時間はかかりましたけど、それだけ厚い壁を一つ一つはがしていった。大体、この密約に真正面からぶつかろうという記者を、刑罰で

罰するということが自体、間違いなんです。これははっきりしたと思うんです。

密約とジャーナリズムの関係はむしろ、これからが正念場という感じすらします。外交文書を外務省の裁量だけで、これはだめ、これは出す。要するに、サービスで出すというような感覚だったですよ、外交の文書公開というのは。そうじゃない。歴

## 危険と隣り合わせ

冒森 さっきいったように、後輩に頑張ってもらうしかないですね

(笑)。問題はまだ完全に片づいてない部分があるわけですから。廃棄された、捨てられたと称している文書もまだいっぱいあるらしいし、これから国会で、この問題の議論が出てくるでしょうし。それから、今後また密約が交わされる可能性もあるわけだから、そういうものを十分監視しなければならぬ。これからの後輩の人たちに非常に重い課題を残したということじゃないですか。

佐藤 我々のころは、コンピュータ、パソコン時代じゃなかったものだから、とにかくネタを探るには歩くしかないわけですね。とにかくレグワークがすべてであっただけ、

史は繰り返すというけれども、過ちを次の世代がしないために、必ずこれは残さなきゃならぬし、いずれ、30年なら30年、25年なら25年の後に、外交交渉は国民の検証にさらされる。そういうシステムが確立されれば「外交」の緊張感というのは非常に違ってくると思うんですね。

羽原 後輩記者たちに期待すること、一言ずついただけますか。

## しかしひるむな

清水

最近、かなりいろんな情報がネットです流れるわけですから、ネットから目を外すと、ニュースを逃しかねない。そんな状況があると思うんですね。

その中で後輩たちは、少なくとも民間ジャーナリズム、資本主義下のジャーナリズムは、お金をもらって、とにかく読んでもらえるネタをどうやって探すか、これは大変だなあと、だからこそ、頑張ってくれといわざるを得ないですね。

清水 この仕事は、ある意味じゃ、国と真正面からぶつかり合う、という意味も含めて危険と隣り合わせの仕事でもある。しかし、ひるむな、ひるまないでほしい。果敢に本当の問題は何かということ突き詰める

のは、ジャーナリズムの永遠の使命ですから、これはもう「ひるむな」というふうにいいたいですね。

羽原 きょうは長時間ありがとうございました。

50年にも及ぶ「密約」取材は、多くの教訓を残しました。「密約」を隠し覆そうとする政府首脳、外務省幹部らの権力に対して、執念を持って追いつけた報道陣のエネルギーは、ジャーナリズムの信念を貫いたものといえるでしょう。座談会を聴くなかで、日米関係を見直さない限り、本来の平和は確保できないし、抑止力のあり方ももういちど基本的な分析を加えないと、軍事力先行の状況を変えることはできないように感じました。一例に過ぎない「普天間」問題だけで全体が紛糾するのも、原点である日米関係はどうあるべきか、政権交代を機に大きな見直しをしないところから来ているように思います。日米地位協定にしても、もういちどこれで良いのか、討議してみることが必要です。冷戦体制下の枠組みのなかに「密約」を温存してきたことがわかったいま、従来通りの発想で良いのか、大きな課題をくみ取りたいものです。

(羽原清雅)

## 村本博之カメラマン死亡

バンコク 4・10

デモ隊との衝突を撮影する村本カメラマン  
＝ロイター提供最前線で遺した  
「最後の映像」▶長田 宙  
(日本テレビ報道局)  
バンコク支局

や、直前に取材していた別の場所で催涙弾を撃ってたけどタイの催涙弾はそこまできつくないね、などと冗談まじりに話してもいた。

日本から来て連日、炎天下のなか現場で取材していたからか、頬のあたりが日焼けで赤くなっていたのが印象的だった。

その後、現場では時折興奮したデモ隊と治安部隊が小競り合いを起こしていた。そんな中、兵士側から撮影していた私がカメラを下ろすと、反対の赤シャツ側に村本さんがいた。2メートル程の距離で目が合い、はにかんだような、苦笑いをしたような表情をお互いに浮かべ、会釈した。これからどうなるんだろうね、と言われたような気がした。

## 騒乱の中に冷静な姿が

まもなくして私は夜のニュースに映像を追い込むため支局に戻ったのだが、私が取材していた場所から少し離れた場所で激しい衝突があり、ロイター通信の日本人カメラマンが死亡したと地元テレビ局が伝えている。すぐに、亡くなったのは村本さんだと判明した。

信じられない思いでしばらくぼう然としていた。そしてふと思いついて自分が撮影した映像を見返してみ

た。そこには村本さんがデモ隊の中でカメラを担ぎ、取材している姿が数回映っていた。村本さんは常に最前線でカメラを回していた。と同時に、村本さんは、衝突の中でそこだけ別の空気が流れているかのよう

に、静かに、冷静に撮影していた。二日後、村本さんが最後に撮影した映像が配信された。まさに最前線で撮影された映像には、一瞬にして戦場と化した現場の様子や、緊迫感が捉えられていた。目の前で起きた爆発で兵士が逃げる中で、やはりあせることなく、冷静に、後ろに下が

りながら撮影を続けていた。目の前で起きていることを伝える。それだけを考えているかのように。この時撮影された映像は、多くの死傷者を出した当日の現場の様子を捉えた映像として今でも世界中のテレビ局で使われている。

わずかな時間しか一緒にいなかった私に対してさえそうだから、村本さんはその人柄と、その仕事振りできつと周囲の人間に多くのものを残していかけたのではないだろうか。

最後に、村本さんのご冥福をお祈りいたします。そしてご家族、ご友人の皆さまに心からお悔やみ申し上げます。

(おさだ・ひろし 2004年入社)

## 追悼

そんな現場で取材を続け、双方の緊張感が一時落ち着き、一息をついていた午後5時頃、村本博之さんとお会いました。村本さんはデモ隊側からこ

3月中旬から始まっていたタイ・バンコクの反政府デモ。政府側がそのデモ隊の強制排除に動き出したと一報があったのは、デモが始まっておよそ1カ月が経った4月10日の午前だった。昼過ぎにはバンコク市内のあちこちで両側が衝突し、私もそのうちの1カ所に取材に向かった。私が到着した現場では数百人の治安部隊と千人近いデモ隊が横幅30メートルほどの道路一杯に広がり、にらみ合っていた。

ちらに向かって歩いて来たのだが、村本さんの背が周りより少し高かったからか、シンボルである赤をまとったデモ隊の波から出て来たからか、遠くからでも目についたのを覚えている。そしてなんとも言えない人なつっこい笑顔で「日本のマスコミの方ですか」と話しかけてきた。

## 柔らかな笑顔と15分間の会話

そこでお互いに簡単な自己紹介をしたのだが、村本さんは笑顔が本当に柔らかくて、初めてお会いしたのに非常に親しみやすい方だった。ほんの15分ほどのことだったが、本人が東京支局に勤務し、数日前からデモの取材の応援で来ているという話

## 普天間移設問題

政府の対応のまずさ  
島の怒りを増幅

平川順一郎

(南日本新聞社奄美総局)

島はとにかく怒っている。米軍の普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の移転先として徳之島が浮上して約3カ月。当初は取材する側も「現実味に乏しい」「多くの候補の一つ」程度の感覚で、ここまで問題がこじれるとは想像できなかった。

怒りを増幅させているのは、政府の対応のまずさだ。政府から当事者に対して何の情報も伝えられないのに、報道では「徳之島」の地名が踊る。町長の1人は「官邸に行った際、平野官房長官は『マスコミの噂だ』と答えた。そんな不誠実な人は信用できない」と、まさに吐き捨てるように話した。

瀧野官房副長官から町長への面会打診も異例の形で表面化した。南日本新聞をはじめ数社の記者が町長と話しているとき、秘書官から電話がかかってきた。普通は記者を閉め出すだろう。しかし町長は、記者やテレビカメラの前で電話を受けた。政府と地元の情報関係はゼロに等しい。

小さい島で事態は日々動く。1人支局の徳之島支局（遠藤智支局長）だけではとても対応できない。4月上旬以降、本社社会部と奄美総局が交代で応援に入る態勢をつくった。

徳之島には南日本新聞のほか、奄美群島をエリアとする南海日日新聞、奄美新聞という2つの地元紙の総局・支局がある。同じ鹿児島県とはいえ、海で隔てられた本土と奄美群島では、歴史や風土、言葉さえまったく違う。地元2紙の地域への密着度は段違いだ。

南海日日新聞の大野純一編集局長にこう問い掛けられた。「奄美は沖縄と同じ米統治下にあった歴史がある。地域の将来を考えれば、おのずと方向性は見えてくる。そういう使命感がある。これが県本土でも、やっぱり南日本さんはバランスをとりますか」。

私たちには「反対の声を取り上げれば、賛成の声も」とバランスをとる習性がありしみついている。島には確かに賛成派がいる。その声を取り上げた報道に、「賛成派が多いと東京で受け止められる」という不満も渦巻く。宮城県出身で島に住んで十数年の遠藤支局長も「闘牛に熱狂する島民の姿や以前の政争と重ね合わせたステレオタイプの報道には違和感がある」。

4月18日の大集会の前後は、海外メディアも含め、百数十人の報道陣で島はあふれた。それなのに島民からは「島の声は正確に伝わっていない」という不満がもれる不思議な状態だ。

逆の立場で考えれば、これまでど



反対集会には島の人口約6割の1万5000人（主催者発表）が集結した＝4月18日

## 一口メモ 徳之島

徳之島には徳之島、天城、伊仙の3町があり、人口は計約2万6千人。サトウキビと公共事業が基幹産業だ。名前でも分かるように、全国各地で病院を経営する徳州会病院を築いた元衆院議員徳田虎雄氏の出身地。80～90年代にかけて自民党の保岡興治氏とあらゆる選挙で激しい争いを繰り広げる「保徳戦争」で知られた。地盤を引き継いだ息子の毅氏が自民入りしてから、以前のような島を二分する激しい選挙は消えつつあった。



れだけ真剣に沖縄の悩みを受け止めていたのか、隣県の地方紙の記者として自問を繰り返す。同じ琉球弧にあり、似たような歴史を持つ奄美だけに、島の悩みも、報道する側の悩みも深い。島民の話、運動の雰囲気、島の歴史や風景…。現場を歩き、答えを探すしかない。（4月28日記）

ひらかわ・じゅんいちろう  
入社 社会部 日置支局長 1990年  
4月から奄美総局 政経部を経

## アフマド・ラシード ジャーナリスト

4・1(木) 囲む会 司会 脇祐三  
委員 通訳 長井鞠子 出席 49人  
HP動画 会見速記録

## ▼アフガン安定は時間との戦い



オバマ米大統領は就任後、「アフガニスタン

という表現を避けるようになった。米国内で厭戦気分が強く、「出口」の明示が政治的に重要になったからだ。米軍を増派する一方で、2011年7月から米軍撤退を始める方針を米政権は示している。

アフガニスタンをめぐる国際情勢分析で知られるパキスタンのジャーナリスト、アフマド・ラシード氏は囲む会で、現地の情勢安定に向け「あと16カ月で多くのことを達成できるのか」という危機感を鮮明にした。

カルザイ政権の統治能力は弱く、34州のうち30州でタリバンの勢力回復が目立つ。その状況下で、米国は民主化やタリバン打倒といった目標にこだわらず、軍事介入の幕引きに傾いた。そして、タリバンも他の政治勢力も周辺国も、米軍撤退をにら

んだ駆け引きを始めている。米政権は軍事作戦でタリバン勢力を押し戻した後なら話し合いを始められるという考えだが、包括的な政治合意を急がないと、情勢はさらに混乱の度合いを深める――。

そう指摘するラシード氏は、「タリバンも消耗しており、完全な国際的孤立を恐れている」「米国と国際社会は今すぐタリバンとの話し合いを始めるべきだ」と強調した。その訴えの切迫感が、まず印象に残る会見だった。

アフガン情勢と密接に関係する隣国パキスタンの国内事情、イラン、インド、中国など周辺国の政治的な思惑についても、要点を押さえた説明で参加者の理解を深めた。

「日本はアフガン周辺国のすべてと友好関係にあるのだから、もっと広範な役割を果たせるはず」「日本のメディアの関心の低下に失望している」。日本人ジャーナリストが消息不明になるなど現地の状況は厳しいが、日本への苦言が多かったことも付言する必要がある。

日本経済新聞論説副委員長

脇 祐三

## 瀬谷ルミ子 日本紛争予防センター 事務局長

4・2(金) 研究会「ユーラシア」⑬  
アフガン編 司会 川村晃司委員  
出席 36人 HP動画

## ▼DDR後 タリバンの影響力増す

イスラム教国アフガニスタンは完全な男社会だ。その中であって、タリバン政権崩壊後の和平プロセスで、2003年6月から約2年間にわたり、日本政府が担当した武装解除・動員解除・社会復帰(DDR)の中心人物として活躍した。長年内戦が続くアフガンで、軍閥から戦車や自動小銃を回収して非軍人として社会へ送り出したDDR。女性ならではの苦労話は出なかったが、交渉で女性性が口をきくことは許されず、大使ら交渉担当者に頻繁にメモを渡すなどして百戦錬磨の司令官らから巧妙に妥協を引きだしていったと聞く。

DDRはプログラム通り完了したが、現状を見れば効果には疑問が残る。瀬谷氏は、武装解除によって各地でタリバンの影響力が増したことを認め「(米



独が担当する)国軍や警察の地方展開が不十分だった」と指摘。軍と警察の強

化が不可欠と説く。

日本の支援の在り方については「逆に現地で活動する人にマイナスの影響を与えることもある」と指摘。海目による給油活動はほとんど知られず、逆に「日本の中立性が保たれた」と手厳しい。政府の方策は「邦人保護の対象となることを懸念し、リスクを負わない決断をしがち」といい、カルザイ政権の中立性が疑問視される中、金だけをつぎ込んで有効活用されない可能性を訴えた。

5年後のアフガンは①今のまま、外国部隊駐留が続いている②外国部隊が撤退しタリバンが政権の一部に入っている――の2パターンを予測。DDRでの経験を踏まえ、「タリバンとして何を求めているか、妥協の配分のやりとりが大切だ」と指摘。タリバンの政権入りで「特に田舎で女性に対する規制が強まる可能性が高い」として、和解プロセスでうまく交渉していく必要性を主張した。現在も年の半分をソマリアやスーダンの紛争地で地域社会の支援に当たる瀬谷氏。これからも経験に基づく厳しい提言を続けてほしいと思う。

共同通信外信部

遠藤 幹宜

はらぐち  
原口 一博 総務相

4・12 (月) 記者会見 (地域深考①)  
司会 泉宏委員 出席 153人 HP動画

▼見えぬ地域主権改革の具体像

新たなシリーズ「地域を深く考える」の一番手を務めた。鳩山政権の「1丁目1番地」という地域主権改革の旗振り役だけに、テーマにはうってつけの人物だろう。

だが、地域主権改革の具体像を聞こうと集まった人々には、いささか物足りなかつたかもしれない。

地方分権とどこが違うのか――。

この問いには答えた。分権という用語には、中央から地方に権限や財源を「分け与える」というニュアンスがこもる。「上」に立つ霞が関が、「下」にいる自治体に恵んでやるという響きがある。

それを地域主権と  
言い換えることで、  
改革の主役は霞が関  
ではなく、自治体の  
側、それも住民なの  
だと自覚してもら  
う。主権者の住民が  
行動しなければ、世  
の中は何も変わらないのだから、と  
いう解説だった。

そうそう、そうなのだ。「お任せ



民主主義」ではないけない、とうなずく。で、どうするのか。当然、次に具体策を聞きたい。どんな政策で、どのような制度設計をするのか。

だが、緑の分権改革、定住自立圏構想、ICT維新ビジョンといったプランが踊ったわりに、各論は奥行きを欠いた。政府は夏に地域主権戦略大綱を決める。そのなかに、法律で自治体の仕事を縛る「義務づけ」の廃止や、ひも付き補助金の一括交付金化、都道府県から市町村への権限移管の道筋をどう描くのか。

具体策を検討中のいま、目立つのは権限や財源を手放すまいとして防御策を練る各省庁の壁の高さだ。それをどう乗り越えるのか。

こうした疑問への答えは、ただひとつ。「決めるのは各省ではありません。鳩山総理が議長の地域主権戦略会議です」だった。各省の抵抗を首相が戦略会議でねじ伏せる。こんな担当大臣のシナリオが実現する日が来るのか。ほんとに。

朝日新聞編集委員

坪井ゆづる

かわむら  
河村 たかし 名古屋市長

4・14 (水) 記者会見 (地域深考②) 司会  
菅沼堅吾委員 出席 137人 HP動画

▼庶民革命 決戦は議会解散リコール



鳩山政権の迷走で政治が流動化するなか、首長新党など首長たちの動向に注目が集まる。その1人が

名古屋市で市民税減税の恒久化や市議の報酬半減を掲げて市議会と真っ向から対立する河村たかし市長。臨時議会を1週間後に控えた時期だけに「市議会は市民をなめ切つとる」「絶対に許さない」と敵が心をむき出しにする毒舌が相次いだ。

河村氏が「庶民革命」と呼ぶ改革の柱はまず減税だ。増税阻止を目的で作られた英国議会を引き合いに「減税をやらないなら政治はいらない」と説く。ただ名古屋市の市債発行残高は1兆8000億円を超えている。同じく減税論者で日本創新党を立ち上げた山田宏・東京都杉並区長が「名古屋はまず借金を減らすべきだ」と指摘するように異論は根強い。

これに河村氏は「日本が財政危機というのはウソ。国債は国内で消化され、金利も安定している」と反論するが説得力はどうか。金利上昇局面では「その時は政権交代して国債が売れるような政策に変えればよい」と言うだけでは危うさを残す。

改革のもう一つの柱は「議員の家族化」を防ぎ、市民の政治参加を促すことだ。「議員の居心地が良いと長くやりたくなり、長くやるには役所と癒着する」が持論。議員報酬の半減で「政治のボランティア化」を目指す。住民の政治参加を促す試みは小中学校単位で作る「地域委員会」で、選挙で委員を選ぶのは全国でも例がないという。ただ、権限縮小を警戒する市議会の反発で地域委員会を拡充する予算も通っていない。

臨時議会も議会側の勝利に終わり、決戦は住民による議会解散のリコールが成立するかどうかにか持ち込まれる見込み。解散に必要な署名は36万5000人分。1年前の市長選で51万票を獲得した河村氏にどれだけの支持が集まるのだろうか。

日本経済新聞地方部編集委員

斉藤 徹弥

## ヤコブ・M・ラブキン モントリオール 大学教授

4・15（木）著者と語る 司会  
会田弘継委員 通訳 西村好美  
出席 49人 HP動画

### ▼シオニズムへの内なる批判

「反シオニズム (anti-Zionism)」という、世界的に広がる政治的、宗教的思想がある。さまざまな理由からシオニズム（ユダヤ民族主義運動）に反対し、同運動が1948年パレスチナに建国したイスラエルの正当性を否定する。反シオニズムは、イスラエル内外のユダヤ人の一部にも主張者がいる。他の、例えばアラブ人などの反シオニストとは区別して「ユダヤ人反シオニスト (Jewish anti-Zionist)」と呼ばれる。

ユダヤ教のユダヤ人反シオニズム団体もある。同教超正統派に属するネットレイ・カルタで、「ユダヤ人は、メシアの降臨まで国家を持つことは禁じられる」との教義からシオニズムに反対。イスラエル国家の平和的消滅を主張し、パレスチナ解放運動に積極協力している。



ユダヤ人反シオニストで目立つのは知識人。ラブキン教授はそのひとりで、6

年前、「トラーラーの名において—シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史」（邦訳が4月に発売）を発表し、世界的に注目された。

さて、教授は講演で「シオニズム国家イスラエル」の正当性は現在、法、経済、文化、学問、軍事面で深刻な挑戦を受けていると説明。パレスチナ和平交渉にも言及し、「2国家解決案」である現在の「ロードマップ（行程表）交渉」は袋小路に入ると語った。2国家解決案はイスラエルの存続を前提とする。

気になったのは、教授が反シオニズムの学問的業績として、最近邦訳されたテルアビブ大学シロモー・サンド教授の著書『ユダヤ人の起源』を紹介したこと。同書は「古代ユダヤ人の子孫はパレスチナ人」などと主張し、日本でも評判になった。

しかし、イスラエルの高名な歴史学者ベン・アミール・シロニー・ヘブライ大学名誉教授は同書を酷評。「パレスチナ人やヨーロッパの左派の人々におもねるために書かれたものと見え、学術的な価値は一切ない」と指摘している。

元読売新聞カイロ支局長 藤原 和彦

## 池田 守男 もりお

### 公益認定等委員会委員長

4・15（木）記者会見 司会  
菅沼堅吾委員 出席 68人  
HP動画

### ▼公益法人 淘汰でなく質の向上へ



「企業  
の『自助』、  
政府によ  
る『公助』  
が肥大化  
し、人と  
人が助け  
合う

『共助』の精神が喪失した。ぬくもりと温かみのある社会をつくっていくためには、民による公益活動が盛んになる必要がある」

百年以上前に創設された公益法人制度の改革が進められている。その第一線に立つのが池田守男氏だ。

新制度は2008年12月に施行され、5年かけて移行する。従来の各省や自治体による許可を廃止し、登記だけで一般法人を設立。その中で基準を満たすと認定されれば「新公益法人」として税の優遇を受けられる。認定の判断は内閣府の第三者委員会と都道府県の機関が担い、池田氏は内閣府で委員長を務める。

役所の審査は厳しくなりがちだが、資生堂の社長時代、トップダウンで

なく、下から支えるサーバント・リーダーシップに徹したという池田氏は温かい審査に努める。それでも、内閣府所管の約7000の公益法人のうち、これまで新公益法人に認められたのは約170。申請や審査のスピードアップを目指し、ホームページを分かりやすく改修したり、出前相談会を実施していくという。

いま鳩山首相が掲げる「新しい公共」の担い手として、NPO（民間非営利団体）が注目されている。公益法人という点、天下りや役所からの補助金など、悪役のイメージが先行しがちだが、そうした団体は一部にすぎない。公益法人も前面に出てしかなるべきだ。

池田氏は新制度について「公益法人が従来の主務官庁の枠にとらわれず、事業を見直し、活動を広げる好機にしてほしい」と力説する。2万4000ある公益法人の淘汰でなく、質の向上につなげ、国民一人一人が「公」を担う全員参加型の社会を目指したい。そんな改革にかける熱い思いが伝わってくる会見だった。

東京・中日新聞政治部次長

清水 孝幸

矢田 立郎 指定都市市長会会長  
(神戸市長)

4・16(金) 記者会見(地域深考③)  
司会 川戸恵子委員 出席 45人  
HP動画

▼役割にふさわしい新大都市制度を

昨春秋、神戸市長に三選されたが、今回は政令指定都市市長会会長の立場での登場である。平成の合併により、政令市は19市に増えた。合計人口は2、500万を超え、「経済活動の半分は政令市の都市圏で展開されている」。日本を引っ張る「エンジンの役割を担うのが政令市」というわけだが、救急医療や消防で近隣地域を支える役目もある。その割に十分な権限や財源が与えられていないというのが政令市の不満である。

特に税財源面での不満は強い。「神戸市は地域の活力を高めるために、山の土砂を海に運び、人工島を三つと空港をつくり、企業誘致を進めてきた。しかし、それによる税収増加分の多くが国と県に入り、神戸市には固定資産税とわずかな法人市民税しか入らない」と税制の問題点を指摘する。これで



は成長戦略拠点の役割を果たせないというわけだ。現状では、医療や雇用の権限も不十分だし、県との間に二重行政も発生しやすいという。そこで、役割にふさわしい「新たな大都市制度が必要」というのが政令市長会の主張である。

鳩山政権が進める「地域主権戦略」は政令市の期待に沿うものだろうか。その目玉政策の一つはひも付き補助金の一括交付金化だが、政令市の評価は高くない。「国から地方への税源移譲までの経過措置であり、地方が担う分野の補助金は全額税源移譲すべきだ」と注文を付ける。

自民党が推進していた道州制は権交代により小休止の格好だが、「関西では、道州制の前段階として、広域連合に向けて走り出した」。防災や観光など共同で取り組みやすいものから始める。気になるのは、道州制に伴う大都市分割論。「大きく固まっているからこそ人材が集まり、集積効果を生む。道州制になったら、大都市を30万人規模に分解していいとは思えない」と一蹴した。元日本経済新聞論説委員兼編集委員 松本 克夫

ジグミ・ティンレイ ブータン首相

4・16(金) 記者会見 司会 川村晃司委員 通訳 西村好美 出席 58人 HP動画

▼外国援助依存は2020年まで

ヒマラヤ山系の立憲君主国ブータン。この国から初のクラブゲストになる一行は独特の民族衣装でやってきた。インドと中国チベットに挟まれた人口約70万の小国がいま、存在感を放つのは国々の経済発展の尺度がGNP(国民総生産)に置かれる中、前4代国王が唱えたGNH(国民総幸福)の考え方を国づくりの指針に掲げていることだろう。



会見で首相は自国の開発と近代化についてセールスマンのように語った。外国の援助への依存は「今後10年間」と区切り、環境条件をフルに生かした「グリーン経済」によって達成させたい、と明言。そこにGNHの役割があつて「全国民に意識的に幸福を追求してもらいたい」と力説した。具体的な説明を求める質問には「答えるには2時間かかる」と言いながら国民に貧富差が少ない、森林資源が豊か、

安定した治世など条件が備わっていることを挙げた。

これまで日本が果たしてきた農業の技術指導、インフラ整備、教育の振興といった援助に「意味ある貴重な支援をいただいた。最も大切な開発のパートナー」と感謝した。この点は私自身、2月にブータンを旅して私たちと風貌やメンタリティーが

良く似た人々が日本に強い敬愛の念を抱いているのを実感したところだ。

直前の鳩山首相との会談が延びて会見は少し遅れて始まった。2人は「幸福について話し合い、完全に意見が一致した」という。鳩山首相には心癒されるひとときだったに違いない。

米国、欧州での外交活動を経て、ここ10年以上、外相や首相を務めるだけに、なめらかな英語で自信に満ちた応対ぶり。ゲスト帳には筆ペンを選び公用のゾンカ文字で署名「幸あれ」の言葉を添えた。

元朝日新聞調査研究室長 村野 坦

うつのみや  
宇都宮けんじ  
健児

日本弁護士連合会会長

4・19(月) 昼食会 司会  
児玉良平理事 菅沼堅吾委員  
出席 71人 H P 動画

## ▼標的絞りミラクルを

東京などの大弁護士会の主流派が推した候補を破った宇都宮さんは、多重債務者やオウム真理教被害者の救済など、多くの弁護士が敬遠したテーマに早くから取り組んできた。「弱者の側に立つ運動の組織者」という印象が強い宇都宮さんが、業界団体のトップというあまり似合わない役柄を首尾よく演じられるのか。登板したばかりで決めつけてはいけませんが、前途は多難と思わざるを得ない。



目下のところ、マスコミが最も関心を寄せているのは、法曹人口の増加を減速させるという「公約」だ。政府が掲げた司法試験合格者「年間3000人」という目標は急激すぎたとしても、宇都宮さんが示したのはその半分。当選が決まった直後の各紙論調は、そこに内向きな姿勢を感じ取り、一様に危惧を表した。「一斉に同じようなトーンで記事が出たのは一種異様な感じがした」。

会見で宇都宮さんは、こうかみついた。確かに、宇都宮さんが強調した若手弁護士の就職難は、私などが理解しているより深刻なのかもしれないし、今後の推移を注意深く見る必要がある。だが、利用者にとってはまだまだ敷居が高く、分野によつては、目玉が飛び出るような報酬を払われる弁護士

サービスの現状にメスを入れずに、司法修習生への給費制維持を叫んでも世間の理解は得られないだろう。会見で唯一、「らしさ」を見せたのは、こうした疑問に対して、「僕は勝算があつてやってるんじゃない。勝算がなくても駄目なものは駄目と言う」と語気を強めた場面だった。宇都宮さんの掲げる政策には、法律扶助の拡充など、日弁連にとつても悲願で、市民にも歓迎されるものがある。2年の任期はあつという間なので、ここは標的を絞って、グレーゾーン金利の撤廃の時のようなミラクルを起こしてもらいたい。

読売新聞社会部

恒次 徹

ジャクリーン・ノボグラッツ  
アキユメン・ファンド創始者兼CEO4・22(木) 囲む会 司会 会田弘維  
委員 通訳 吉国ゆり 出席 37人  
H P 動画

## ▼援助ではなく尊厳につながる投資

相手の目をじっと見つめて質問に答える姿に、りんとした強さを感じた。ルワンダの女性向けのマイクロファイナンス団体の設立・運営など80年代からアフリカの現場を中心に活動を続けてきた実績への自負がにじみ出ていた。

イースタリーの著書『傲慢な援助』の表現を借りれば、上から目線で計画を押しつける「プランナー」ではなく、現場目線で必要な支援を考える「サチャー」だ。自らの経験が、現場重視の雰囲気さらに醸しだしているのかもしれない。

未解決の貧困問題に対する彼女のアプローチは「忍耐強い資本」の投資だ。2001年に彼女が創設したアキユメン・ファンドは、リターンが少ない可能性を認識しつつも、途



上国で貧困問題の解決にからむビジネスの起業家に投資する形で支援している。

「貧しい人は依存ではなく、尊厳を望んでいる」という考えが軸にある。「慈善活動は、期待値が低すぎて失敗することがあった」と指摘したように、従来の寄付や援助と一線を画す。水や住宅などを手頃な値段で提供できる新しいビジネスに対して、1件あたり30万〜250万ドルを投資する。現在では16カ国、200人以上が1万ドル以上を寄付しているほか、大手財団からの寄付も集める。投資総額はおよそ4000万ドルにまで増え、周囲からの期待がうかがえる。

ルワンダで活動支援したベーカーリーストップは、1994年に発生した大量殺害で営業でなくなった。一緒に団体を設立したパートナーには殺された者もいれば、大量殺害の罪で終身刑を受けた者もいる。そんな悲劇を経験しながらも「変化も起きるということも見た」とプラス面を強調した。日本語に翻訳された著書『ブルー・セーター』でもかいま見ることのできる彼女の活動は、今後も要注目である。

朝日新聞GLOBE編集チーム

築島 稔

Cheng Yong Hua  
程 永 華 駐日中国大使

4・27(火) 昼食会 司会 今井環副理事長  
坂東賢治委員 出席 154人 HP動画

▼「誠意示す」日本語の会見

「日本語がわかっていのに通訳を通すと皆さんに、いろいろ言われかねない」。こう笑わせて「誠意を示すために」終始、日本語で会見した。

中国の政府高官には日本語に堪能でも公式発言は通訳に頼る人が多い。発言が誤解を生むことや、後で問題になるのを恐れるためだ。2月末の着任後、初の公式会見を最初から最後まで日本語で通じたことに自信と意気込みがうかがえた。

吉林省出身の55歳。創価大留学のほか、駐日大使館で4回勤務したことがあり、日本滞在は通算20年を超える。駐日公使を離任後、マレーシア、韓国

の大使を歴任して4年ぶりに日本に「帰った」。

「日本の朝野各界と力を合わせて、日中の戦略的互恵関係を強化したい」と力を込める。

進まない東シナ海のカス田共同開発や、中国海軍の日本近海航海などクラブ側が質問する「敏感」な問題に正面から答えた。



「春曉（白樺）カス田は日本側の

出資を受け入れる協力開発で、共同開発という報道には誤解がある」

「中国海軍は上海沖から日本艦艇に追跡された。日本の演習に中国軍が付きまといたら、どう思うか」

公式見解ながら懇切丁寧な回答ぶりには、実直な人柄もうかがえた。

日中関係は表向き静かだが、中国の経済規模が日本に迫り国際関係でも中国の存在感が増すにつれ、日本では中国の躍進に対する焦りにも似た感情が広がってきた。

両国民の交流も拡大し、ささいなトラブルが重大問題に発展するリスクを絶えず抱えている。前任者が日本専門家ではなく言葉

の壁があっただけに、新大使の発信力は国民感情改善に向け期待が持てそうだ。

ただ、手堅い外交官

の会見に、新しいニュースやヒントがないと

不満に思うのは、新聞記者の業にすぎず無い物ねだりと言うべきだろう。

東京新聞・中日新聞説副主幹

清水 美和

ヘルマン・ファンロンパウ

EU大統領

4・28(水) 記者会見 司会 宇治敏彦副理事長 通訳 長井鞠子 宇尾真理子 出席 95人 HP動画



▼控えめに少しずつ

中国や韓国の人々と同じ通貨を使い、国境を自由に行き来する。安全保障も経済も、東アジアという大きな枠組みで考え、負担を分かち合い、アジア人大統領が束ねる。

まるで夢物語だ。

だが60年以上前、戦後の欧州復興を目指した人たちも、きつと同じようにに思っていたのではないか。鳩山由紀夫首相の提唱する「東アジア共同体」について大統領は「少なくとも不可能ではない」と断言した。「当時は誰も欧州統合を想像できなかった。今、東アジア共同体を誰も想像できないのと一緒にだ」という。

確かに欧州も、最初からいきなり巨大政治機構を目指したわけではない。まずは積年の「宿敵」仏独が、

石炭・鉄鋼を共同管理するという現実的課題から始めた。こうした積み重ねが、今のEUにつながる。大統領は言う。「夢を持つこと。でもまずは小さなステップから」。

夢を語る大統領は、会見でも東アジア諸国に「歴史的な対立を乗り越えて」と寛容を説く。とはいえ自身の「足元」になると、例えばイスラム教徒が多いトルコのEU加盟については明確な反対論者。ベルギーの国会議員だった04年には「トルコは欧州の一部ではない。加盟すれば、キリスト教を普遍的価値観とする欧州の活力が弱まる」と発言している。会見では明言を避け、巨大欧州の利害を調整する立場からか、多くのテーマについて控えめに「ステップ・バイ・ステップ」を強調した。

松尾芭蕉を好み、4月に句集まで出版した大統領。オランダ語の自作の俳句の中に、次の一句がある。

雪の羽 枝木に宿る 一重ずつ

なるほど。やはり「少しずつ」がお好きらしい。こうして着実にEUの歩みを進めていくのだろう。句風を変えずに。

毎日新聞外信部

篠田 航一

200カイリ時代

日ソ漁業交渉

## 暫定取り決め草案をスクープ



白井 久也

ソ連が1991年に崩壊してから、早くも20年近く経った。

今でもソ連を研究している学者などを除くと、多くの日本人にとって、ソ連という国はとっくの昔に忘れられた存在となってしまうているようで、今さら顧みられることはないのではあるまいか。だが、私にとってのソ連は、何よりも忘れ難い国である。「米ソ冷戦」華やかなりし頃の75年から79年の4年間、朝日新聞モスクワ支局長として、特派員生活を送ったことによる。

当時のソ連は、のちにゴルバチョフから「停滞の時代」と揶揄された、「ブレジネフ時代」の末期であった。米国と軍事的な覇権を争ったソ連は、核戦力ではほぼ互角、通常戦力では米国をやや上回る「超大国」と

言われていた。事実、見てくれは「重厚長大」の見本みたいな国で、大変立派であった。だが、その内情たるやお粗末極まりなかった。米国の長年の軍拡競争がたたって、国民経済は疲弊し、一般市民の生活は非常に貧しかった。

何か珍しい商品や、日頃、入手が難しい食料品や化粧品などの売り出しがあると、買い物客の長い行列ができた。町のレストランは店舗数が少ないため、店の前の路上は席待ちのお客でいつも溢れかえっていた。気温が零下10度、20度に下がる厳寒でも、ソ連名物の行列現象がなくなることはなかった。「ナポレオンやヒトラーが負けたのは当然だな」と、ロシア人の忍耐強さにはつくづく感心させられたものだった。

西側特派員のモスクワ在勤生活も、大変だった。社会主義国はどこでもそうだったが、その総本山・ソ連の情報統制と取材規制は、決して半端なものではなかった。

## ●モスクワに特ダネなし？

日ソ記者交換取り決めによる日本人特派員は、総勢20人。モスクワの都心から40キロ以遠に取材や旅行に出掛けるときは、48時間前にその目的、日程、使用する交通手段（自動車ならナンバー、飛行機や列車なら便名）、同行者の有無などを露文または英文でタイプして提出、ソ連外務省新聞部の許可を取らねばならなかった。もし行き先が外国人立ち入り禁止地域なら、事前に特別なビザ（査証）をもらう必要があった。

私は外国人特派員が一度も入ったことのない極北地方への取材許可を何回か求めたが、モスクワ在勤中、ビザはついに下りなかった。まだ、ソ連構成共和国だった独立前のバルト3国の取材許可が出て、喜び勇んだのも束の間。出発の前日になって、「外務省新聞部の者だ」と名乗る男から、突然、支局に電話がかかってきて、関連の一部地域の取材許可が取り消されてしまった。

記者クラブ制度が発達している西側諸国では、クラブの求めに応じて、大統領や首相や各省大臣の会見、政府関係者のブリーフィング（背景説明）、記事資料の配布など、様々な広報サービスがあった。だが、秘密主義が徹底していた社会主義国・ソ連にはもともと、そういう慣習はなく、重要情報源に対する「直接取材」は至難の業であった。

4年間のモスクワ在勤中、外務省新聞部がお膳立てしたソ連要人の内外記者会見は、グロムイコ外相とアリエフ党政治局員のたった2回しかなかった。もしブレジネフ書記長ら党・政府要人の政見を聞こうとすれば、国内の新聞・テレビ・ラジオなどが報じる党大会や最高会議での演説などを「間接取材」するほか、手はなかった。

このため、モスクワ在勤の外国人特派員の日常的な取材活動は、もっぱら支局で定期購読しているプラウダなどの新聞・雑誌、支局備え付けの電信受信機に、日夜配信されるタス通信やロイター通信などの記事、常時、つけっ放しにしているラジオ放送などに頼っていた。日本の新聞各紙に似たような「モスクワ特電」が載ったとすれば、もともと情報源は同じだから、「当然の結果」であった。こうしていつしか、「モスクワに特ダネなし」というジンクスが生まれた。本当か？ ならば、試してみよう。それが、私の性分であった。その機会は、意外に早くやってきた。

### ● 3カ月間の長期取材合戦

ソ連が1977年2月24日、突如、「自国の沿岸から200カイリを3月1日から、漁業専管水域とする」と、爆弾宣言の発表を行ったのだ。200カイリ宣言が適用される水域はベーリング海、チュクチュ海（ベーリング海峡の北）、日本海、太平洋、北極海、それにソ連領に属する島々の周辺海域であった。

だが、これらの海域の多くは、日本の北洋漁業の操業区域と重なった。ソ連の200カイリ宣言が実施されれば、自由な操業はできなくな

る。その結果、北洋漁業は壊滅的な打撃が予想された。日本中が、大騒ぎになった。魚価も暴騰した。

本格的な「200カイリ時代」を迎えて、新しい日ソ漁業のあり方を決める日ソ漁業交渉が、途中の中断もはさんで、3月から6月まで延々3カ月間、モスクワで開かれた。長期協定締結まで時間がかかるため、暫定措置の取り決め交渉が先行した。

日本から鈴木善幸農相が訪ソ、イシコフ漁業相と直談判して、日ソ双方とも厳しい箝口令<sup>かんこうれい</sup>をしいた。このため、日ソ交渉の内容は「闇の中」であった。だからと言って、引き下がることはできない。私と同僚の新妻義輔記者は深夜密かに、鈴木農相の宿舎のホテルに夜回りをかけ、単独インタビューをものにした。農相は約1時間、質問に答えてくれた。

その内容は、「暫定措置は月内決着、主張はほぼ通した」と、日ソ漁業交渉の全容を初めて明らかにしたもので、77年3月2日付夕刊のトップを飾った。それまでひた隠しに隠されてきた日ソ漁業交渉の内幕を暴露するもので、日本国内に与えた衝撃は大きかった。すっぱ抜かれた他社のモスクワ特派員たちは、本社から大目玉を食らったようだった。

鈴木農相単独インタビューで、日

ソ漁業交渉の成否の鍵を握る「暫定取り決め」交渉の決着が、案外に早いとの感触を得たわれわれは、その草案の全文スクープに、全力をあげた。日本側は、「これ以上マスコミにかき回されたら、日ソ交渉が駄目になる」と、けんもほろろな応対。「ならばソ連だ」と、突貫を試みた。

日頃、懇意にしているロシア人のある情報ルートに、草案を取ってきてくれるよう、拝み倒した。相手はなかなか、腹の据わった人物であった。「白井さんを男にしてあげましょう」と言って、約束を果たしてくれた。ロシア人は本当に仲良くなる。日本人以上に「浪花節」が通じる。これが実に、面白いところだ。

### ● 5段ぶち抜き大見出しに、乾杯

後日、東京本社から送られてきた朝日新聞（77年3月19日付朝刊）を手に取ると、本記は一面トップで、「日ソ漁業暫定取り決めの両政府案全容わかる」と5段ぶち抜きの大見出し。このほかに、「裁判管轄権触れず」ソ連 操業許可証を発行「スケトウ、規制から除外 日本」と大きな脇見出しが3本もついていた。暫定取り決め両国草案は、経済面を3分の1使って、その全文を収録する大盤振る舞いであった。こうして、

200カイリ時代の日ソ漁業交渉の取材合戦は、朝日新聞の圧勝のうちに、進んでいったのであった。

昼間の取材合戦が終われば、平和な夜がやってきた。モスクワの巷<sup>ちまた</sup>には当時「赤提灯」や「縄暖簾」の類いの飲み屋は一軒もなかった。日本人特派員は各自、わが家をもってその代用とせざるを得なかった。特派員同士が夫婦同伴でお客様に呼んだり呼ばれたりした。日本からの来客も、ひっきりなしだった。たまには日ソ交換留学でやってきた大学の先生たちの面倒も、見なければならなかった。

主な料理は家内が作ったが、台所の力仕事は私が引き受けた。ボルガ川で捕れたというスダク（スズキの一種）は、全長1メートルはある大物。出刃包丁で3枚に下ろし、刺身包丁で刺身を作った。アラは澄まし汁の具に使った。

しこたまウオッカをおおった悪童連中は、意気盛んであった。ワイワイガヤガヤと、モスクワの夜は喧噪のうちに更けていくのであった。

しらい・ひさや会員 1933年生まれ 58年朝日新聞入社 経済部外報部を経てモスクワ支局長 編集委員 定年退社後 東海大学平和戦略国際研究所教授 現在 日露歴史研究センター代表 学校法人杉野学園理事

## 具志堅用高さん

● 私が会ったあの人 スポーツ編⑤ ●

カンムリワシ  
100年に1人の勝負師

▶ 芦澤 清一

プロボクサー具志堅用高(53歳)がファン・グスマン(ドミニカ)を7回KOに破ってWBA(世界ボクシング協会)公認のジュニア・フライ級タイトルを獲得したのは1976(昭和51)年10月10日のことである。所属する協栄ジムの金平正紀会長(故人)が、マスコミを通じて、100年に1人の選手とあおっても、素直に受け止めることができなかった私が、初めてその言葉にうなずいた一戦であった。

沖縄・興南高でアマのモスキート級優勝の経歴がある具志堅が、プロデビューしたのは1974年5月。当時はジュニア・フライ級がまだなかった。そこで最軽量のフライ級での試合だった。相手は後に同級日本チャンピオンになる牧公一(田辺ジム)。判定勝ちしたが、驚くほどの



グスマンを7回KOで世界王座を奪取  
1976.10.10

当事国内最短の9戦目  
(甲府市山梨学院大体育館)  
デイリースポーツ提供

ア・フライ級を新設した。「具志堅のためにできたようなクラスだよ」と大きく出た金平会長。76年1月、初めてこのクラスに臨んだ具志堅は「水を得た魚」のような動きでアメリカから呼んだ世界ランカーを7回KO。100年に1人の男の本領を垣間見せた。

フロックかもしれない、という疑念が私にはかすかにあった。それを払拭してくれたのが、グスマンから計3度ダウンを奪ったの中身の濃い世界タイトル奪取劇だった。プロ9戦目。当時としては世界王座奪取最

強さではなく、金平会長のPR文句がホラに聞こえた。

威信を取り戻すべく同会長は、もう一度牧との試合を組むが、またもKOは成らず。ウエイトの壁にぶち当たった具志堅は「ボクシングやめて沖繩に戻りたい」と周囲に漏らすが慰留された。

入門2年目に世界機構がジュニ

短記録である。

具志堅の異名としては、100年に1人の男よりも「カンムリワシ」の方が慣れ親しまれている。初防衛戦に備えて静岡県三島市でキャンプを張った時のことだ。試合を放映するTBSのスタッフを交えた取材陣の囲み雑談の中で「わんやカンムリワシにないん(オレはカンムリワシ

になりたい)」と彼は言った。

カンムリワシは沖縄の西表(いりおもて)島に住む国の天然記念物に指定されている驚で、本人も幼少のころ、目撃したことがあるという。「あれはすごいね。ゆうゆう空を飛んでいるんだけど、獲物を見つけると、すごいスピードで落ちてきて、一発で仕留めるんだ」と解説付きの変身願望だった。

狙った獲物は絶対に逃がさないという勝負哲学が、倒れた相手に殴りかかるという過剰な闘争行動を何度か起こさせた。過剰というより違法行為だ。現役時代の彼に注意しようとしたことはあるが、闘争心をしほめさせることを恐れて、口にできなかった。

仮に進言しても耳を貸さなかっただろう。今なら冗談にまぎらして言える。防衛13度の不滅の記録を残した上で、ジムの会長となつて後進を育てている彼に、現役時代の情熱は残っていない、ほとぼるの殺気はもうないからだ。



あしざわ・せい  
ち(元デイリー  
スポーツ運動部)

脱北者を本格的に取り上げた初の韓国映画だ。韓国が脱北者を取り扱うことは難しい。

南北の対立の中で、どうしても韓国からの北朝鮮批判という政治的なものになってしまいがちだからだ。映画はそうした傾向に陥らないように努めて配慮している。映画づくりの巧みさを感じる。

南北間を描いた韓国映画には「シユリ」や「JSA」などがある。北朝鮮を同じ民族として扱い、韓国映画の流れを大きく変えた。だが、いずれも現実とはかけ離れたものだった。だが「クロッシング」は南北分断の中で翻弄される北朝鮮の家族の悲劇を、実際の脱北者からの聞き取りに基づき描いている。

映画の冒頭では北朝鮮の地方炭坑町の庶民生活がリアルに描かれている。かつての日本の風景を思い起こさせる。庶民の会話も韓国語ではなく、北朝鮮の方言がそのまま使われており、北朝鮮の生活ぶりが生々し

## クロッシング (3. 31)



### ●脱北者をリアルに描く

く伝わる。例えば「気にしない」という言葉は韓国では「ケンチャナヨ」だが、北朝鮮では「イリオソヨ」となる。映画ではこの「イリオソヨ」が頻繁に出てきて、現実感を与える。

映画は、結核が悪化した妻の薬を求めて夫が妻子を残し中国に越境するところから暗転していく。元サッカーの国家代表だったことから、韓国の支援組織により脱北者の象徴にされ、北朝鮮に戻れなくなる。その間に妻は死亡し、一人残された息子は父を追って中国に越境しようとして捕まり、収容所に入れられる。家族を守ろうとする夫が韓国の支援団体に「今、必要なのは祈りではなく薬なのだ」という悲痛な叫びに、南北分断の犠牲となる庶民の思いがにじんでいる。最後の回想シーンで父子が犬とともにサッカーを楽しむ場面が印象的だ。

共同通信客員論説委員

安尾 芳典

©2008 BIG HOUSE / VANTAGE HOLDINGS. All Rights Reserved.

## ■会議報告■

### 2010年度日本記者クラブ賞選考委員会 (4・8 大会議室)

金指正雄クラブ賞推薦委員長の報告のあと選考に入り、梅津時比古氏を受賞者として理事会に答申することを決めた。

出席 朝比奈委員長、朝倉、住田、伊藤、神谷、久保、小櫃、渡辺、鳥居、玉川の各委員、斎藤理事長、宇治、今井の両副理事長、岩崎専務理事。

### 第311回会報委員会 (4・14 小会議室)

新委員の渡辺雅明新潟日報東京支社次長兼報道部長(旧・八木浩幸氏)を紹介した後、5月号の編集などを協議した。

出席 住田委員長、小西、近藤、菅谷、羽原、堀、渡辺の各委員。

### 第37回監事会 (4・14 大会議室)

2009年度の会計監査を行った。

出席 斉藤、山本、溝口の各監事。

### 第397回企画委員会 (4・16 Cホール)

新委員の篠原昇司日経MJ編集長(旧・玉利伸吾氏)を紹介した後、参院選での党首討論会や今後のゲスト候補などを協議した。

出席 船橋委員長、小此木、星、倉重、脇、原田、篠原、高畑、宮田(一)、会田、西川、田崎、影山、川戸、川村、広瀬、石郷岡、泉の各委員。

### 第392回会員資格委員会

(4・19 小会議室)

新委員の梅田正行朝日新聞ゼネラルマネジャー補佐(旧・森純一氏)、包国信

彦日本経済新聞編集局総務(旧・金子豊氏)、神田和則TBSテレビ報道局編集主幹(旧・斎藤雅俊氏)を紹介した後、5月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 朝倉委員長、梅田、布施、三沢(代理)、包国、梅野、坂本、神田、川嶋、工藤の各委員。

### 第100回総務委員会 (4・23 小会議室)

①09年度事業報告・同収支決算案・次期繰越収支差額処分案(次期繰越収支差額285万1千461円を全額次期に繰り越す)を承認した。②公益社団法人移行認定申請に伴う、(1)役員報酬規則(2)学生会員規則と(3)申請後、微修正が必要な場合は理事長に一任する決議案を了承し、理事会に上申した。

出席 朝比奈委員長、朝倉、神谷、久保、渡辺、鳥居、玉川(福田)の各委員、斎藤理事長、宇治、今井の両副理事長、岩崎専務理事。

### 第485回理事会 (4・23 大会議室)

別記(23ページ)の理事交代を了承後、総務委員会の決議案①②を原案通り承認し、第76回総会に上程することにした。2010年度日本記者クラブ賞を、選考委員会(朝比奈委員長)の答申通り、梅津時比古氏に贈ることを決定した。

出席 斎藤理事長、宇治、今井の両副理事長、岩崎専務理事、朝比奈、朝倉、石田、井上、柴田、児玉、神谷、久保、渡辺、藤延、榎本、竹村、鳥居、福田、梅田の各理事。溝口監事。

## ●ロイター村本さんのジャーナリスト魂に黙禱



「村本さんは、クラブの会見にもたびたび出席、この会見場でカメラ取材をされていたとのこと。現場を大切にされていた、そのジャーナリスト魂を我々もしっかりと守り続けることを誓い、黙禱を捧げたいと思います」

斎藤史郎理事長の提案で、4月10日、バンコクの反政府デモ取材中に亡くなった村本博之さん（43）の冥福を出席者が祈りました（4.12 原口総務相会見冒頭）。

## 情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

## ■モンゴルへのビザなし渡航開始

4月1日から、日本人の滞在が30日以内の場合は査証（ビザ）なしで入国できるようになった。開始にあたり、ジグジット駐日大使が会見した。日本からの年間渡航者数を、現在の1万2千人から2～3万に拡大させたいなどの抱負を述べた。モンゴル大使館：http://embmong.com/main\_jap.php（4.1 宴会場）

## ■HAPPY NEWS2009表彰式

日本新聞協会のHAPPY NEWSキャンペーンの表彰式が行われ、12025件の応募から選ばれた19件が表彰された。大賞は「ヒッチハイクで春つかむ」（中日新聞記事共同配信）にコメントを寄せた、愛知県の長谷川知子さんに贈られた。詳細は協会のサイト「よんどく!」（http://www.readme-press.com/）で。（4.5 10Fホール）

## ■「エクセレントNPO」評価基準発表

言論NPO（工藤泰志代表 http://www.genron-npo.net/）が、NPOを評価するための36項目の基準を発表した。市民が寄付やボランティアをするための判断材料としてNPOの評価基準を設け、NPOの質を向上させる構想を提唱している。（4.12 宴会場）

## ■講演「“崖っぷち”の鳩山政権」

未来をひらく日本委員会（尾畑雅美代表 http://www.nihoniinkai.com/）で、岸井成格・毎日新聞特別編集委員が政局の行方について講演した。（4.15 10Fホール）

## ■日本ラジオ広告推進機構が解散を発表

ラジオ広告の活性化のために2004年3月に設立された「日本ラジオ広告推進機構」（全国96局が加盟 橋本明夫代表 https://www.rabj.org/）が、今年9月末をめどに活動を終息、解散することを発表した。ラジオ環境の激変を受け、今後の研究は、本来の活動範囲を超えるとの判断があったことを説明した。（4.16 大会議室）

## ■「記者会見・記者室の完全開放を求める会」会見

フリージャーナリストらの「記者会見・記者室の改善開放を求める会」（野中章弘世話人代表 http://kaikennow.blog110.fc2.com/）がアピールを発表した。ビデオジャーナリストの神保哲生氏、日隅一雄弁護士、豊秀新聞労連委員長らが会見し意見を述べた。（4.19 宴会場）

## ■平和と安全を考えるエコノミストの会（EPS）会見

「平和と安全を考えるエコノミストの会（河合正弘・日本支部理事長 日本支部HP=http://www.asiawide.or.jp/eps/）」の河合理事長、堤清二顧問、副理事長の宮崎勇・元経企庁長官らが会見し、提言を発表した。（4.21 小会議室）

## ■講演「日米同盟のゆくえ」

日本ジャーナリスト懇話会（竹田純会長）で、毎日新

## 新しいOB会員

おおはる こうのすけ  
▼大治 浩之輔



1962年NHK入局。社会部、放送総局計画部、盛岡放送局長など。NHK退局後、NHK出版、NHKグローバルメディアサービスなど。

師も友も同年代の俊秀もつぎつぎと千の風になっていく。番がくるまで、友との交流を新たに、日本と世界の探求をたのしみたい。

かとう ちひろ  
▼加藤 千洋



1972年朝日新聞入社。広島支局、北京支局、アエラ記者、論説委員、アジア総局長、中国総局長、外報部長、編集委員など。4月から同志社大学教授。

広島から出発した38年間の記者生活でした。メディア環境激変の中ですが、これまでの経験を大学教育で生かしたいと考えています。

しみず かつひこ  
▼清水 勝彦



1972年朝日新聞入社。社会部、アエラ記者、同副編集長、上海支局長、台北支局長、総合研究本部主任研究員など。現在、現代中国宗教研究会代表。

「宗教が分かれば中国が分かる」を実感した現役時代でした。これからは希少価値？の中国宗教ウォッチャーとして頑張ります。

なかい やすろう  
▼中井 康朗



1974年読売新聞入社。外報部、テヘラン支局、パリ支局、論説委員など。

先日、若い人から「新聞はいつまで残るのでしょうか？」と聞かれ、コンマ何秒、返答に時間を要した（と思う）。今後もメディアの変遷を注視したい。

はやの とおる  
▼早野 透



1968年朝日新聞入社。東京本社政治部次長、編集委員などを経て、00年から10年間コラムニストを務める。4月から桜美林大学教授。

日本政治報道に携わって36年、政権交代を見届けて気がすみました。大学教師に転じ、若者に新聞を読む楽しさ、大切さを教えたい。

聞政治部の大貫智子記者が講演した。（4.22 大会議室）

## ■講演「垣根を越えよう エイズ対策の現状と展望」

AIDS&Society研究会議（根岸昌功代表 http://www.asajp.jp/）は90年に発足、HIV陽性者や医療従事者、研究者、ジャーナリストはじめさまざまな分野の人が参加し、HIV感染の拡大防止やエイズを取り巻く偏見の是正などに取り組んできた。設立20周年の今年、研究フォーラムも100回の節目を迎え、厚労省エイズ動向委員長の岩本愛吉・東大医科研教授が記念講演を行った。（4.28 宴会場）

## ■放送人政治懇話会

次のようにゲストを招いた。照屋寛徳・社民党国対委員長（4.7）、石井一・民主党選対委員長（4.14）、大島理森・自民党幹事長（4.21）、河村建夫・前官房長官（4.27）。

## バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

吉  
カクテル「マシュ・ケ・ナダ〜ボサ・ノヴァ  
を聴きながら」

テキーラをベースに、パイナップルジュースとレモンジュースを使いました。ボサ・ノヴァの軽やかなリズムをイメージした、爽やかな色のカクテルです。  
630円

和  
食

伊勢海老懷石 7月2日(金)まで

刺身と煮物と味噌汁に伊勢海老を使ったちょっと贅沢な懷石コースです。先付・琥珀玉子豆腐ほか、造り・伊勢海老姿造り、焼物・太刀魚八幡巻き、煮物・伊勢海老具足煮、揚げ物・鮎魚女挟み揚げ、御飯、伊勢海老の味噌椀、水菓子・季節の果物 (5,250円)

洋  
食

豆腐コース 6月12日(土)まで &lt;昼・夜の部&gt;

車海老の湯葉包み揚げラズベリーソース、豆腐入りコンソメスープ、牛ヒレ肉と焼き豆腐のミルフィーユ仕立て、豆腐とわかめのサラダ、豆腐と白チーズのムース、パン・ライス、コーヒー (2,650円)

## 法人会員代表変更

日本民間放送連盟 (新) 福田俊男 専務理事  
(旧) 玉川寿夫

## 理事交代

南日本新聞社 (新) 井上喜三郎 東京支社報道部長  
(旧) 野口正一  
日本民間放送連盟 (新) 福田俊男 専務理事  
(旧) 玉川寿夫

## ●5月28日に総会記念講演と会員懇親会●

5月28日(金)の通常総会終了後、午後4時30分から俳人の金子兜太(とうた)さんを迎え記念講演会を開催します。演題は「生きものの感覚 俳句の魔性」です。5時30分からは9階宴会場で会員懇親会を開催し、本年度クラブ賞受賞者の梅津時比古・毎日新聞学芸部専門編集委員から受賞のご挨拶をいただきます。出席ご希望の方は必ずお申し込みください。  
メール: kaiken@jnpc.or.jp  
FAX: 03-3503-7271 電話: 03-3503-2722

## &lt;会員の著書&gt;

JAL 再生の嘘 屋山太郎会員

## &lt;招待券&gt;

ルーシー・リー展 日本経済新聞社

<会員現況> 法人会員 134社 基本会員 755人  
個人会員 1,508人 法人・個人賛助会員 69社 178人  
特別賛助会員 79人 名誉・功労会員 9人  
計203社 2,529人

## クラブの電話 ダイヤルイン

|                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| 和食レストラン (9階)      | 会員事務              |
| 3 5 0 3 - 2 7 2 3 | 3 5 0 3 - 2 7 2 5 |
| 洋食レストラン (10階)     | 経 理               |
| 3 5 0 3 - 2 7 6 6 | 3 5 0 3 - 2 7 2 8 |
| 貸室予約、宴会打ち合わせ      | クラブ行事への申し込み       |
| 3 5 0 3 - 2 7 2 4 | 3 5 0 3 - 2 7 2 2 |
| 受 付               | 会見申し込みアドレス        |
| 3 5 0 3 - 2 7 2 1 | kaiken@jnpc.or.jp |

## 会報委員会

委員長=住田良能

委 員=大谷 徹 小西美和子 近藤憲明 菅谷 齊  
富田 恵 羽原清雅 堀 徹男 村澤繁夫  
渡辺雅明

連絡=長谷川和子 本庄五月

(電 話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

## ホールご案内

会員社のホールで開催されるコンサートなどの情報です。

## ●日経ホール

♪6/30 (水) イ・ソジョン〜ショパン&ミュージカル・ナンバーを歌う  
ブロードウェイの「ミス・サイゴン」の主人公に抜擢された実力派女優が、ショパンのピアノ作品に自身が詩をつけたアルバムとおなじみのミュージカル・ナンバーを歌います。(大人 3,500円 子供2,500円)

問い合わせ: 03-3943-7066

## ●サントリーホール

♪6/4 (金)、8 (火)、11 (金) レインボウ21 サントリーホール デビューコンサート2010  
次代の音楽界を担う学生たちがプロデュースした公演です。6/4桐朋学園大学「エリック・サティの世界ー音楽と書簡によるサティ再考ー」、6/8国立音楽大学「モーツァルト×オペラ=様々な愛のかたち」、6/11東京音楽大学「生誕100周年 サミュエル・バーバーー貫いた信条、愛した歌」(各2,000円)

チケットセンター: 03-3584-9999

## ●王子ホール

♪6/4 (金) アッコルドーネ 「フラ・ディアーヴォロ」〜魔術とも薬ともなった歌と音  
イタリアの古楽アンサンブル・アッコルドーネの再来日公演です。歌手を芝居の登場人物に位置づけ、楽器にも役を与える冒険的な演劇風コンサートが欧州の観客を熱狂させています。(6,500円)

問い合わせ: 03-3567-9990

## &lt;訃報&gt;

滝川勇会員(時事通信出身、69歳)が3月30日がんのため、川内一誠会員(テレビ朝日出身、78歳)が4月11日心筋梗塞のため、太田博夫会員(朝日新聞出身、93歳)が5月3日肺炎のため死去されました。謹んでお悔やみ申しあげます。

H P <http://www.jnpc.or.jp/>

資料室 「会見速記録」: 4月の新規掲載

●ゴードン・クロヴィッツ ジャーナリズム・オンライン共同創設者「ネット課金というビジネスモデル」(3. 8) ●我孫子和夫前A P通信北東アジア総支配人「デジタル時代の国際通信社」(3. 24) ●アフマド・ラシード パキスタンジャーナリスト「最近のアフガニスタン情勢」(4. 1)

## 行事予定 (5/6現在)

5. 17 (月) 12:00~13:30 (10階ホール)  
志位和夫共産党委員長
5. 25 (火) 15:00~16:30 (宴会場)  
アルネ・ウォルター 駐日ノルウェー大使を囲む会
5. 28 (金) 16:30~17:30 (10階ホール)  
総会記念講演 金子兜太・俳人  
17:30~19:00 (宴会場)  
会員懇親会
5. 31 (月) 12:00~13:30 (10階ホール)  
白川方明 日本銀行総裁昼食会

ホームページの「会見カレンダー」で、日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をお知らせしています。

## 写真回廊

撮影 長田 栄作 (おさだ・えいさく)  
(共同通信写真部)



核安全保障サミットで 4.13=ワシントン

### 「謙遜」とポピュリズム

寄り添ってきた同盟国の首相をとらえて「不運で愚か」と評し、「最大の敗者」とこきおろしたワシントン・ポスト紙のふるまいはいささか礼節を欠いているが、それを引き取って国会の場で「確かに私は愚かな総理かもしれませんが」と答えた鳩山首相の姿に多くの人々は言葉を失った。「友愛」を理念に掲げた「宇宙人」を自称する首相の大衆人気は、「5月決着」を約束した米軍普天間飛行場移設問題が暗礁に乗り上げて危険水域に落ち込んだ。その要因となった八方美人の優柔不断な内政と外交の姿勢はつまるところ、政権がよりどころとしたポピュリズム（大衆迎合）の行き着いた結果にほかならない。政権浮揚へ向けて、赤字国債に頼った手当のばらまきや事業仕分けで期待したのが、民意から沸き起こる喝采ならば、会食の席でオバマ大統領とわずか10分の会見で帰国したさきの訪米が映し出したのは、決断できないこの国の指導者を前にしてさまよう同じ民意の鏡であろう。「私の思いを」「愚直に」「させていだきたい」。謙虚という美德のさきで飛び交う「鳩山語」はうつろである。サラブレッドの毛並みと知的な品格に寄せた大衆の喝采が、政権への失望というブルーメンになって舞い戻る。(柴崎 信三)